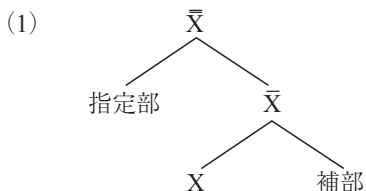


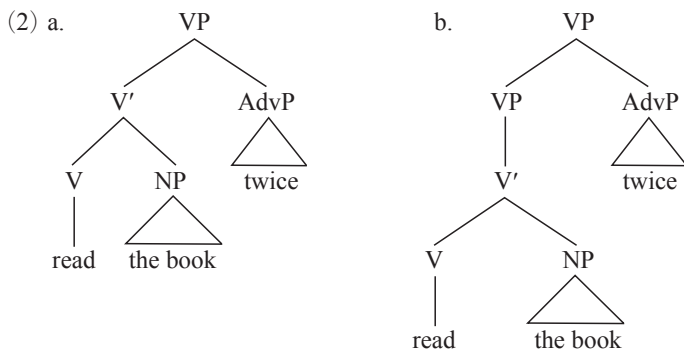
26 Xバー理論

Xバー理論 (X-bar theory) とは Chomsky (1970) によって提案された理論であり、D構造での句構造 (phrase structure) は **Xバー式型 (X-bar schema)** と呼ばれる (1) の構造を持つという仮説である。



\bar{X} は X^{\max} や XP とも表記され、最大投射 (maximal projection) と呼ばれる。 \bar{X} は中間投射 (intermediate projection) と呼ばれ、X は **主要部 (head)** と呼ばれる。 \bar{X} と姉妹関係にある要素を **指定部 (specifier)**、X と姉妹関係にある要素を **補部 (complement)** と呼ぶ。X は変項であり、例えばここに I を代入すると (従来の S に相当する) 屈折句 (Inflectional Phrase, IP) の構造が、V を代入すると動詞句 (Verb Phrase, VP) の構造が、N を代入すると名詞句 (Noun Phrase, NP) の構造が得られる。印刷の都合上、 \bar{X} と \bar{X} は X'' 、 X' と標記されることが一般的である。

補部は句を構成する上で義務的な要素であり、付加的な要素である **付加部 (adjunct)** と区別される。付加部は X' あるいは XP と結合する要素で、範疇を変えない。例えば、動詞句 read the book twice では、the book が補部であり twice が付加部である。この動詞句は (2a) あるいは (2b) の構造を持つ。



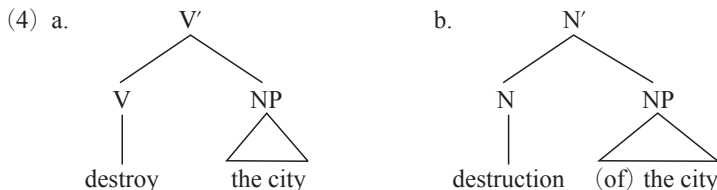
標準理論 (standard theory) では、D構造の句構造は (3) のような句構造規則 (phrase structure rule) によって形成されていた。

(3) a. $S \rightarrow NP Aux VP$ b. $VP \rightarrow V NP$ c. $NP \rightarrow Det N$

しかし、句構造規則 (3) による句構造の分析では、すべての句が主要部を持つという**内心構造 (endocentric structure)**の特性を説明できない。例えば (3a) では主要部が明らかではない。また、動詞句 *destroy the city* と (派生) 名詞句 *destruction of the city* の平行性も捉えることができない。

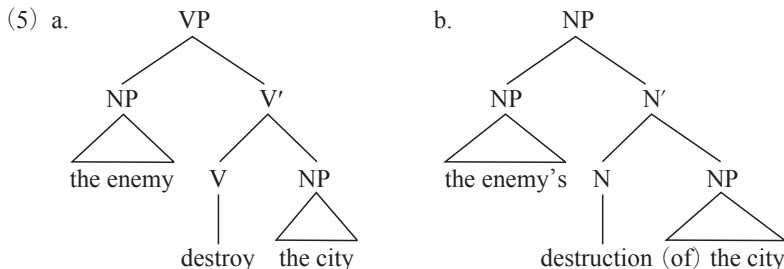
一方 Xバー理論では、すべての句は X を主要部とする投射であるため、内心構造を持つことが捉えられる (その後の展開は Chomsky 1994 を参照)。

また、動詞句と名詞句の平行性もうまく捉えられる。Xバー理論に従うと、例えば動詞句 *destroy the city* と名詞句 *destruction of the city* はそれぞれ (4a, b) の構造を持つ。



(4) では動詞 *destroy* と名詞 *destruction* がそれぞれ主要部に位置し、NP *the city* がその補部に現れており、動詞句と名詞句が平行性を示す。

さらに、**動詞句内主語仮説 (VP-internal subject hypothesis, VISH)** (Koopman and Sportiche 1991 など) を採用することにより「主語」の平行性も捉えられる。VISH は、文の主語 (外項) は VP 指定部に基底生成され、その後 IP 指定部へ移動するという仮説である。VISH を採用した場合、文 *the enemy destroyed the city* は基底構造として動詞句 (5a) を持ち、名詞句 *the enemy's destruction of the city* との平行性が捉えられる。



(佐藤 亮輔)